

関口巽と云う人物の第一印象は、本人には気の毒なだけけれども、それ程良いものではなかった。

取り分け悪相だとか、表情仕草が憎げだとか、態度話し方が横柄だとか、そうしたことはない。物腰は柔らかく寧ろ慇懃で、無闇に自己を主張するような様子もないし、粗暴でもない。人当りは極めて温厚そうに思えた。強いて欠点を論うとするならば、他者と決して視線を交えぬよう必ず下に向けられている視線だとか、発音が悪くおまけに小声なので豪く聞き取り悪い話し方だとか、落ち着きなく常に浮きがちになっている腰だとか——要するにそうした、他者に不安定な印象を与える身体的言語表現を多用すること——に尽きるだろうか。

そう——その覇気のない瞳は、他者を拒絶しているかのようにも見えるのだった。

関口巽の有り様というのは、此処に居るのが厭で、厭で仕方がないと——そう云う風にも取れるのだ。対面している相手をも含めた、その場の凡てを、関口巽は厭うている。

そう思えぬこともない。

だから軍人達は——軍人達に限らず真つ直ぐ前を見て大きな声で話す連中は——関口のような態度を好ましく思わぬのかもしれない。己が排除されるような気になるのだろうか。そうであるなら、寧ろ臆病なのは関口ではなく彼等の方と云うことになるだろう。臆病な彼等は暗黙のうちに、他者に対して己を受け入れる寛容なる態度を示すよう、礼儀規律の名を借りて強要しているだけなのかもしれない。

いずれにしろ——関口巽と云う男が社交的と云う言葉とは凡そ懸け離れたところにいる人物であることだけは、間違いないことのようにだった。

おどおどしているのだ。

好意的に見るならば、内気、或は奥床しく遠慮がちな人物——と取れないこともない。しかし関口巽の執るような大層煮え切らぬ態度は、人に依つては大いに不愉快なものとして映ることだろう。

私には軍隊経験がないので瞭然とは判らないのだけれど、特に軍人めいた、規律に煩瑣い連中には疎ましがられるに違いない。そうした、所謂軍人的な有り様に殊の外違和感を持つ、外ならぬこの私がある感じなのであるから。

関口の伏せがちの眼に穿たれた瞳の孔は、凍て付いた湖面にも似た陰鬱な色を湛えており、それは時折怯えたように収縮した。またそこから発せられる弱弱しい視軸は、一向に定まることをせず、凡そ無意味にそちこちへと飛んだ。

どうしても打ち解けることが出来ぬような気にさせる眼だった。否、こちらが打ち解けようと努力することさえ予め拒絶されているようにも思えた。

しかし、そのあまり芳しくない印象を、私はすぐに払拭することが出来た。

或る推測をしたからである。

その推測が正しいのなら、関口巽は、私のまたとない研究対象となるだろう。

そうならば——。

今日の佳き日に彼を招く結果になったことは、偶然とは云え大正解だったと云うことになる。否、正解どころか、私にとつて、これはまたとない婚礼祝いの贈物となるかもしれない。

何と素晴らしいことだろう。

気が逸つた。

だが、勿論それは推測に過ぎない。

だから——。

その着想が湧いた瞬間、私はその推測が正しいものなのかどうか、確認したいと云う強い衝動に駆られたのである。否、確認せずにはいられなくなってしまうのだ。

私は遠目に観察する。
汗に濡れた開襟襯衣がところどころ身体にへばり付いていて、逆も見苦しい。

関口は車中に居るのである。同行者の動向を気にしているものか、幾度も不自然に首を上げ下げし乍ら、ぼそぼそと聞き取り悪い声で執事の山形に何かを告げている。その途中にも、その他者を拒絶するような卑屈な視線は、度度私に向けられた。

歓迎しよう。

私の家族——多くの鳥類達と、そして今宵私の妻となる女性と共に——。

私は一步外界に踏み出す。

同時にいそいそと山形が戻つて来た。執事の背後に怯える関口の姿がやけに小さく見えた。

ご主人様と私を呼び、山形は控える。

「不測の事態が発生致しました」

不測の事態とは何かと訊き返す。

山形は一礼した。

「頼みにしておりました榎木津子爵のご令息が御眼をお患いになられた由、只今ご友人の関口様よりご報告が御座いました。榎木津様は一時的に視力を失われていらつしやるご様子で御座います」

「失明されたのか」

「一時的に」

「それでは——」

私は関口の更に背後、黒塗りの自動車に目を遣つた。それならば、あの中に関口の同行者は居ないのか。関口一人で来たとしても云うのだろうか。

私の視線の移動に目敏く気づき、山形はいや、いらつしやるのです、と答えた。

「あのお車の中には——」

「いらつしやるのですね」

「はい。しかしお加減が」

「体調が宜しくないと仰せなのならすぐに休養して戴きなさい。場合に因つては手当てするなり、医師など呼ぶなりして差し上げるべきでしょう」

「それは——その」

「何か不都合がありますか」

「不都合と申しますよりも」

では——何だと云うのだろう。

「礼二郎君は自動車を降りられない程容態がお悪いのですか」

「いや、その」

山形は言葉を濁し、頭を下げたまま私の傍に寄り、低く抑えた声で、

「お畏れ乍ら申し上げますが、矢張りこの場はお引き取り戴くのがご賢明なご判断かと心得ますが」

と云った。

私は執事の耳を覗た。

「そうしたことを決めるのは山形ですか」

「い、いえ、わたくしめは」

「あの方が居ると——山形は何か窮ることもあるのですか」

何故わたくしめがと山形は顔を上げた。

「わたくしめは——」

「それに」

私は山形の耳から目を逸らす。

「彼——」

山形は振り向いた。

全身に倦怠感を纏つた関口が所在なげに立っている。酷く心細そうである。

山形はああ、と声を上げた。

「あの、関口様で御座いますか。いや、あの方はどうも——」

「礼二郎君を帰してしまつたなら、彼も引き揚げて仕舞うのではありませんか」

当然お帰りになりますでしょうと山形は云った。

「寧ろその方が宜しいかと」

「何故です」

「憚り乍ら申し上げますなら、わたくしめには、あの関口さまのご容態の方が馨しくないのではないかと、そう思えます程で」

「多分彼はあれが常態でしょう」

その筈だ。

はあ、と怪訝な声を発して山形は再び関口の方に顔を向けた。執事の不信に満ちた視線を感じたのだらう、関口はいっそう不安げに、その身を硬くしたように窺えた。

「いや、大量に汗をおかきでいらつしやるようですし、そわそわとしていらして、ええ、お言葉も聞き取り悪かったものですから——」

まるで御酒に酔うてでもいらつしやるようで御座居ますがと、山形は深刻そうに感想を漏らす。なる程、執事の如き者の目には、関口の態度はそのように映るものなのか。

あのように卑屈で覇気のない物腰は、他者より上位に立ちたい者にとっては怒りの対象——或る種の脅威となり得るけれども、下位にあることが当然の者にとっては、寧ろ憐愍の情を懸けるような対象としかならぬものだろう。

「創作する人間と云うのは逆もナイーヴなものです。執事とは違います」

そう答えた。

そうなのだ。

関口異は——小説家なのだ。

小説家。何と興味深い人種であろうか。

私は活字を追い、文章を汲み、思考を重ねることで世界は理解し、今日に至った人間である。私にとって書物は観念の貯蔵庫であり、つまり読書は認識することとイクオールなのだ。書物から新しい知見を得ることは、私の人生にとって必要不可欠な行為であり、且つ無上の喜びなのである。

そんな私にしてみれば、小説家と云う人種は、その書物を——世界を、観念を書き記す、否、創り出す人人に他ならない。彼等は自在に観念を紡ぐ。そして彼等にしか創れない世界を構築する。そう、彼等は彼等の内部にしかない彼等だけの世界を、現実と等価にする人人なのだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。